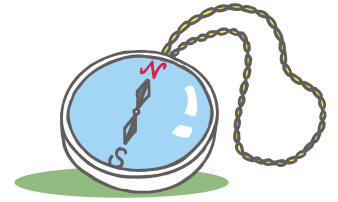


# 羅 針 盤

第 17 号

令和7年9月8日（月）



## ◆ 真の強さとは

全国高等学校野球選手権大会、いわゆる「夏の甲子園」大会の決勝が、先月の8月23日（土）に阪神甲子園球場で行われ、沖縄尚学高等学校の優勝で幕を閉じました。今回の「夏の甲子園」大会の東東京の代表校であった関東第一高等学校野球部の米沢貴光監督は、「高校野球とは、悔しい経験を得ることで自らを成長させてくれる場である」と話されています。米沢監督は平成12年から関東第一高等学校野球部の監督に就かれて、当時の東京大会では、際立って帝京高等学校という存在が大きかったそうです。「打倒帝京」の目標を掲げて、平成19年の夏の東東京大会の準決勝で帝京高校と対戦することとなったそうです。試合の当日、試合会場となった神宮球場には土砂降りの雨が降り出し、中盤から木製バットでの試合となりました。泥でホームベースも見えないくらいの雨が降り、関東第一高校にようやく追い上げムードが漂ってきた七回裏の攻撃終了後に、審判から降雨によるコールド試合が宣言され、惜しくも敗退することとなりました。残念なことに、関東第一高等学校の選手の中には整列したくなさそうな選手、あるいは、コールド試合に対して文句を言うような選手までがいたそうです。一方の帝京高等学校の選手たちは、全く喜ぼうともせず、雨の中で、監督をはじめとして選手全員が、じっと整列をして待っていたそうです。その姿勢をベンチから見ていた米沢監督は、「ああ、これが帝京なのか。だから強いのか。」とつくづく思われたそうです。次の日から新チームでの練習試合が続きましたが、全く結果が出ませんでした。これまで、「打倒」という言葉をスローガンとして掲げてきたけれど、うまくはいかなかったと感じた米沢監督は、生徒たちを集めて「あの帝京高校との試合に勝っていたら、私もガッツポーズをして、生徒の君たちと一緒に大喜びしていたと思う。だから、うちのチームは勝てない。私も君たちも変わらないといけない。」と話されました。同じ平成19年の秋季大会でその結果が表れ、監督として初めて甲子園大会に出場されることとなりました。帝京高校野球部の前田三夫監督は、高校野球の先頭に立ち続けて来られた人です。米沢監督は、前田監督から多くのことを見習う必要があると感じて、「打倒帝京」を掲げることをやめました。それ以降は、生徒たちに「高校野球は、仲間とやっているんだぞ。」と話されるようになったそうです。当然のことながら、監督として帝京高校や二松学舎大学付属高校といった関東の強豪校を倒したいという思いは強く持っておられます。しかしながらその一方で、彼らもまた仲間であると考えられるようになったそうです。自分たちができることを精一杯やって、そのうえで負けたときは仕方がないと。負けたときには、勝った選手に「頑張れよ」と言える選手であってほしいと強く願うようになったと話されました。



「自分たちだけが良ければ良い」、「勝てば良い」といったことではなく、相手の心情が分かるようなチームにならないといけないと思っていると言われ、帝京高校野球部の前田監督や選手たちから教わったことは、私にとってのかけがえのない財産となっています。米沢監督の財産となった考えに、「真の強さ」といったものが伺い知れるはずで。生徒の皆さんも、どんなときにも、凜とした姿で、相手に対する敬意を忘れることなく、相手の気持ちを慮（おもんばか）ることができる人であってほしいと願っています。